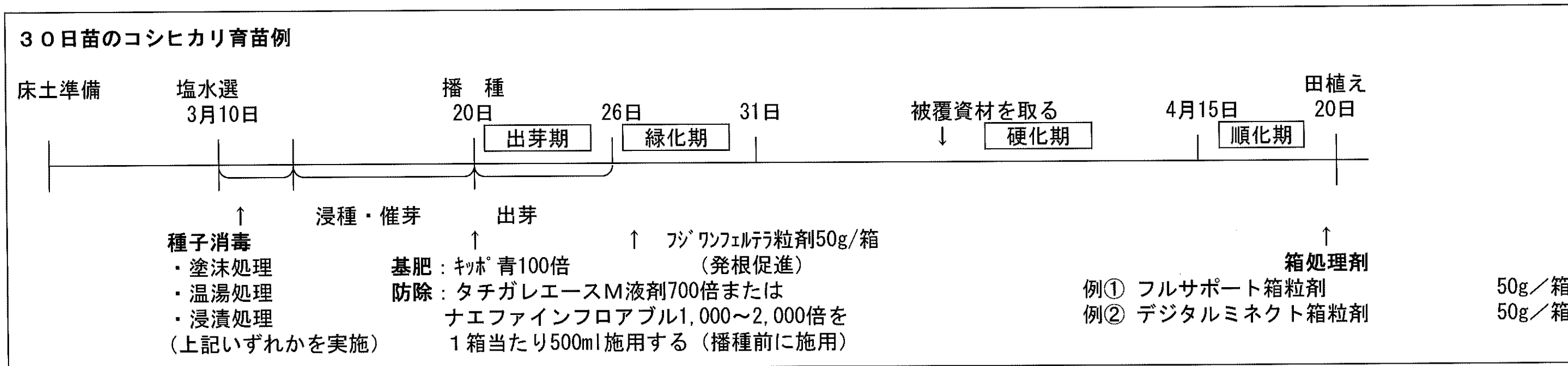


1. 育苗ステージ



2. 育苗の計画

育苗の計画にあたっては、田植え日の決定により、それより逆算し、種子の選別、浸種日を余裕をもって決める。

<田植えを4月20日とした場合の育苗計画例>

	塩水選及び種子消毒	浸種・催芽	播種及び育苗
作業期間	1日	10日	32日
作業月日	3月10日	3月10日～	3月20日～

<目標とする育苗日数と苗の形質>

	育苗日数	草丈	第1葉身長	葉数
稚苗	20～22日	12～15cm	3～4cm	2～2.5
中苗	30～35日	15～20cm	3～4cm	3～4

※稚苗の田植えは、気温が上昇する5月頃が望ましい。

3. 播種までの準備

(1) 種子の準備

- 10a当たり3kgを準備する。
- 種籾は、採種ほ産のものを使用することが望ましいが、自家採種の種籾を使用する場合は、病虫害被害の無い種籾を使用する。

※種子は同じ条件下において発芽させても、籾によって発芽の早さや発芽後の伸びる早さに違いがあるため、充実した良い種子を選ぶ。

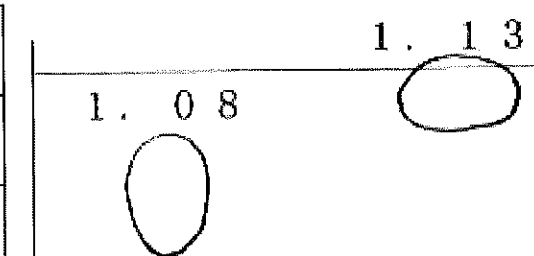
(2) 塩水選

- 塩水選により沈んだ、充実した種籾を使用する。
- 選種した種籾は、充分水洗いする。

<水10リットルに対する必要量>

種別	比重	食塩の場合	硫酸の場合
うるち種	1.13	2.0kg	2.7kg
もち種	1.08	1.2kg	1.5kg

※生卵による比重液の調整



(3) 種子消毒

○ 購入種籾及び自家採種籾に限らず種子消毒を実施する。

1) 浸漬処理

◇例1

使用薬剤名	倍数	対象病虫害名	備考
テクリードC フロアブル	200倍	いもち病, ごま葉枯病, 苗立枯細菌病 馬鹿苗病, もみ枯細菌病, 苗立枯病	24時間浸漬し、水洗いせず直ちに浸種する。
スミチオン乳剤	1,000倍	イネシンガレセンチュウ	

※ 薬液量は、籾容量の倍量が必要。

※ 残液の処分には注意。用排水路には絶対流さないこと。

◇例2

使用薬剤名	倍数	対象病虫害名	備考
エコホープDJ	200倍	いもち病, 褐条病, 苗立枯細菌病 馬鹿苗病, もみ枯細菌病, 苗立枯病	24時間浸漬し、水洗いせず直ちに浸種する。

2) 温湯処理

① 乾燥籾を60℃の温湯に10分間浸漬。

(濡れた種籾で行うと発芽率が低下します。)

(濡れた種籾だと籾殻内部への温湯の浸透時間が短縮するため、発芽に必要な各種酵素が不活化、発芽率が低下)

② 引き上げ後、ただちに冷水(水道水等)で冷やす(約5分間以上)。

(4) 浸種

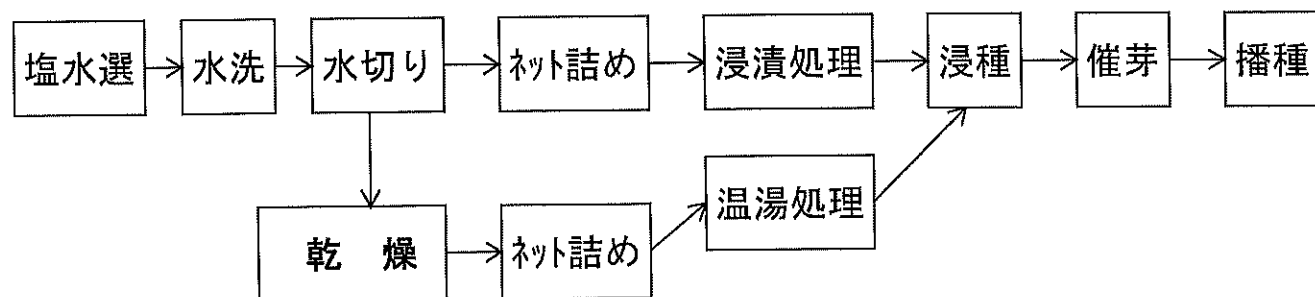
○ 浸種の袋詰め籾量は、1袋に10a当たりの籾量(3kg)とし、ゆったりめの袋を使用する。

○ 種子消毒をした後清水に漬ける。

○ 水温は10~15℃程度が良く、2~3日毎に水を交換する。

○ 浸種期間は、積算水温で100℃を目安とする。(10~14日程度)

<塩水選から浸種までの手順>



(5) 催芽(発芽)

○ 催芽は、浸種によって吸水させ、発芽準備の整ったところで、発芽に最適な温度を与えて一斉に催芽させる(鳩胸状に)。

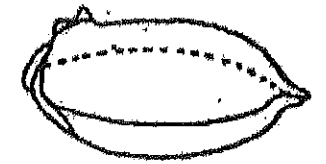
○ 催芽の環境条件

酸素 : 発芽には酸素が充分あること。

温度 : 発芽温度は、30℃が最適である。

光 : 発芽に光は無関係で、暗黒下でも発芽には差し支えない。

※ 鳩胸期の籾の姿



(6) 育苗床土の準備

○ 山土を使用する場合(1箱4リットル必要)

強粘土質及びれきの多い土は避け、保水性や通気性の良いpH 5.0~5.5の培土を選ぶ。

○ 粒状培土を使用する場合

pH及び肥料が調整されている。

○ 育苗マットを使用する場合

育苗箱に入るよう成形され、pH及び肥料も調整されている。

※ 床土のpHが低すぎる場合は、苗立枯病の病原菌であるトリコデルマ菌の発生が多くなる。pHが高い場合は、フザリウム菌が増加する。

※ 床土は基本として、深さ2cmを確保し、覆土は0.5cm必要である。

(7) 育苗箱への基肥及び土壌殺菌剤の施用

○ 山土を使用した場合

基肥及び土壌殺菌剤を混用又は水に混ぜて灌水する。

(粒状培土及び育苗マットでは必要なし)

<キッポ青(5-6-4)・タチガレースM液剤を使用する場合>

キッポ青を 100倍) に溶かし、播種前に必ず、1箱当たり
タチガレースM液剤700倍) 500ml灌水する。

※ キッポ青は、液肥としての効果のみでなく、土壌改良材(団粒化)としての作用もある。

<育苗肥料・タチガレースM粉剤を使用する場合>

育苗箱1箱当たり4リットルの山土に (育苗肥料(4-4-4) 20g
タチガレースM粉剤 6g)

をムラの無いように混合する。

播種前の灌水は、多すぎないように500~700ml/箱にとどめる。

4. 播 種

- 播種日の決定は、田植えの予定日より逆算して決定する。

< 播 種 の 基 準 >

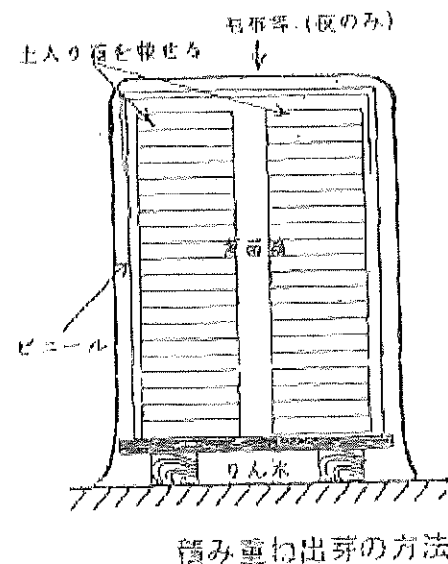
	育苗日数	播種量(催芽糶)	必要箱数
稚 苗	20~22日	140~160g/箱	16~20箱/10a
中 苗	30~35日	100~120g/箱	14~18箱/10a

- 覆土の厚さは、0.5cmを基準とする。
- 覆土に用いる土は、目の細かいものは、生育不良の原因となるため、粒状培土等の土を使用するとよい。
- みみず覆土の使用
1箱当たり約1kgを覆土として施用する。
(粒状になっており覆土専用の資材)
- 覆土後は、灌水しないよう注意する。

5. 出芽期の管理

< 積み重ねて出芽させる方法 >

- 適温は30℃に保つ。
- 芽が1cmぐらいになるまで積んでおく。
(3~4日程度)。
- 日中の温度が30℃を越える場合は、むしろ等で遮光し、温度調節を行う。
- 夜間は、10℃以下にならないよう注意する。
- 出芽を確認した箱から並べ、直後に灌水をする。
- 苗代で出芽させる場合は、低温に遭う場合が多いため保温に努めるとともに病気に注意する。



6. 緑化期の管理

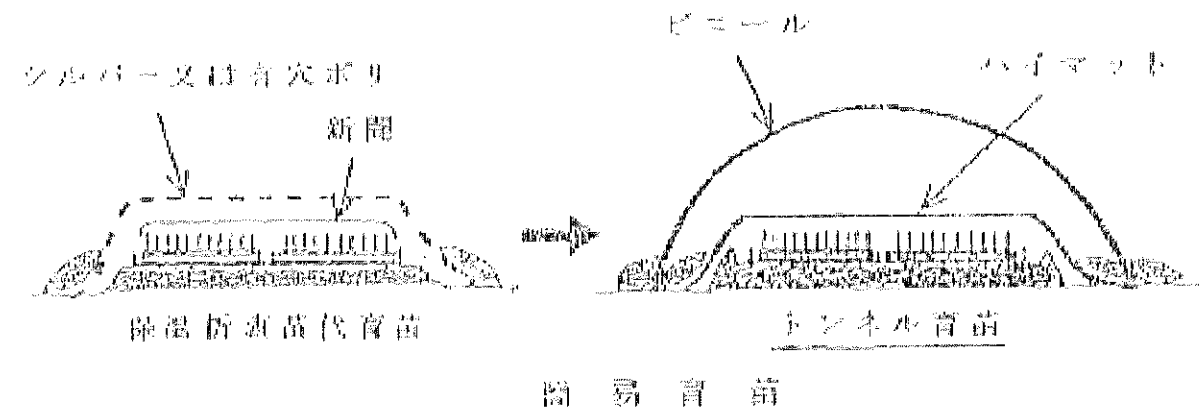
- 出芽後、苗の高さが3~4cmまでの大きさに生長すると、被覆資材を適宜開閉し、温度調節を行いながら緑化を始める。
- 温度管理は、日中は25℃、夜間は15℃を目安に行う。
- 2葉期までに苗を伸ばし過ぎると、後半に過繁茂や徒長苗になりやすいので注意する。
- 苗の伸長及び発根促進
フジワンフェルテラ粒剤 50g/箱(緑化始期1回)
(いもち病、イネミズゾウムシに効果)

7. 硬化・順化期の管理

- 硬化期に入ってから、被覆物を取り除き、充分光線に当てる。
- 灌水は原則午前中に1回のみとし、15時以降の灌水は避ける。
- 育苗時にカビが発生した場合は、タチガレエースM液剤700倍、又は、播種後14日以内であれば、ダコレート水和剤500倍液を1箱当たり500ml灌注する。
※ 播種時にタチガレエースM(使用回数1回)を使用している場合は、タチガレン液剤700倍液を使用する。
- プール育苗の場合は、ひたひた水で管理する。
- 田植えの4~5日前からは、苗を充分外気になれさせる。

8. 育苗方法

- 保温折衷苗代育苗は、天候に左右されやすいため、トンネル育苗、又は、ビニールハウス育苗とする。



9. 本田の準備

(1) 土づくり肥料の施用

- 例① ケイカル 200kg/10a
+BMようりん又はリンスター60kg/10a
- 例② 阿波カリン 60kg/10a
- 例③ 阿波のとれ次郎 60kg/10a
- 例④ 福袋 40kg/10a

(2) 早期耕耘の実施

土づくり肥料を施用後の耕耘は、土壌が乾いている時期に実施する。

(3) 基肥の施用

栽培管理暦を参考にし、品種・ほ場に適した肥料を適量施用する。